

○吳 震著『陽明後学研究』

二〇〇三年四月、

上海人民出版社刊。B 6 版、495頁。(324000字)

(張汝倫・陳昕主編『当代中国哲学叢書』)

序章 現成良知—陽明学とその後学の思想展開を良知現成の観点から簡明に論じたもの。

第一章 無善無惡

(1)王陽明の立論 (2)王竜溪の解釈 (3)王陽明と楊晋庵の対立

(4)顧憲成と管東溟の論争 (5)余論—四句教についての考え方。

第二章以下第八章までの七つの章は、七人の陽明後学についての論である。第二章の 錢緒山論は、(1)天泉証道 (2)無善無惡 (3)思想遍歴 (4)良知の運用 等を論じ、第三章の聶雙江論は、(1)虚

靈知覚、(2)良知本寂、(3)未発の時、(4)善惡の氣、(5)主静、(6)格物無功夫、(7)心の定体を論じる。以下も、第四章の羅念庵論、第五章、陳明水。第六章、歐陽南野。第七章、王龍溪。第八章、耿天台を、それぞれの特色であるキーワードを項目として立てて論じている。例えば、主静無欲、良知現成説批判、慎独知幾、良知と知覚、良知本虚、調息法、養生実践というようなタイトルである。また他の思想家との関係や比較として、耿天台と王龍溪、耿天台と羅近溪、異端批判、李卓吾との和解などの項目もある。

第九章は陽明後学と講学活動で、以下の、(1)講学と実学、(2)異業にして同道、(3)政学合一、(4)泰州学派と講学活動というものがあ

り、これは次に掲げる『明代知識界講学活動繁年』と係わる内容である。

◇主要引用書目及び其の略称 ◇索引

○吳 震著『明代知識界講学活動繁年 1522—1602』

二〇〇三年九月、学林出版社刊。B 6 版、463頁。(37万字)

字) 引言 陽明心学と講学活動

陽明学が思想運動として形成され、社会的実践として展開する時に、講学活動がその中心でありその場が講会で、その実態を明らかにすることを目的としている。時代の設定に当たっては、社会的、政治的活動や思想文化活動などの関連から、著者は小野和子氏の『明季党社考』(1996年、同朋社)や謝国禎氏の『明清之際党社運動考』(1982年、中華書局)の影響のもとに、嘉靖から万暦年間を設定している。

正篇 明代知識界講学活動繁年：1522—1602

引徵書目に列挙されている文集等から、講会に関するものを抄出して年代順に配列し、説明を加え、その根拠の資料や文献等についてを脚注とし付している。

嘉靖元年(西紀一五二二)、王心斎が北上して、講学した事から始まり、李卓吾の自刎した万暦三〇年(西紀一六〇二)に至るまでの八十年間にわたる活動記録である。後の講会の一覧表に年時があるので、それを索引がわりに利用すると、講会における講学状況と、思想運動の展開の状況が分かり、陽明学を中心とする思想運動の理解を深められる労作である。

附表 一、明代書院地域分類表(大久保英子『明清時代の書院の研究』による)

二、浙江一带講会一覧表 三、江西一带講会一覧表(ともに、中純夫「王畿の講学活動」による)

引徵書目 本書で採り上げられた書は、(1)明人文集から一六七種の本、中国国内ものだけでなく、日本の内閣文庫、静嘉堂文庫、蓬左文庫から京都大学、九州大学の図書館所蔵のものもある。(2)30余種の地方志、(3)近人の著作、(4)近人の論文。講会一覽表。後記よりなる。

### ○陳 来著『中国近世思想史研究』

二〇〇三年一〇月、商務印書館刊 A5版 670頁

本書は、著者が、一九八〇年代から二〇〇一年にかけて、『北京大学報』『中国哲学史』『中国學術』『国学研究』等の雑誌や、論文集に寄稿した論文を集めたもので、宋明儒学、特に朱子学、陽明学を中心とした内容であるが、陸稼書や方以智など清朝にまで及んでいる。著者には、既に『朱熹哲学研究』(1987)——博士論文。『朱子書信編年考証』(1989)、『有無之境——王陽明哲學的精神』(1991)、『宋明理学』(1992)等これらの方面の研究結果が出版されているが、本書は、それ以後またはそれに収められていないものをまとめて一書にしたものである。

上編は、朱子学を中心とするもので、宋代思想のアンソロジーの最も早い版本である『諸儒鳴道集』の持つ思想資料の価値を論じた『略論『諸儒鳴道集』』を巻頭に置く。次いで「宋明儒學的“道”、“理”概念及其詮釈」、「宋明儒学仁說的生態面向」、「論宋代道学話語的形成和轉變」、この後は、朱子に関するものが5篇あり、それらは「李延平与朱晦庵」、「朱子『家礼』真偽考議」、「朱熹淳熙初年の心說之弁」、「朱子哲学中“心”的概念」、「朱子雜考」で、これに錢穆の『朱子新学案』を詳細に論じた「『朱子

新学案』述評」がある。他に北宋の張載、明末清初の陸世儀と陸隴其についての論である。

下編は、明代の世俗民間思想から清初の思想家方以智、黄道周や王陽明や陽明学を中心としたそれに関する逸文などの文献的な資料の価値について論じたもの等十四編である。

「明嘉靖期王学知識人的會講活動」、「蒙学与世俗儒家倫理」、「黄道周的生平与思想」などの力作の後に、「王陽明与陽明洞」、「遺言録」与『伝習録』、「王陽明語録佚文与王陽明晚年思想」から、『明儒学案』や王龍溪、鄒東廓らの文集にある王陽明の言行録の佚文を集めたもの、また陽明の友人湛甘泉の嘉靖十五年版の文集の資料的価値について論じたものである。

#### 〔著者紹介〕

陳 来 一九五二年生まれ。浙江省温州の人。一九八一年、北京大学卒業。一九八五年、哲学博士。現在、北京大学哲学系教授。中国哲学史学会副会長。国際中国哲学会副会長。著書『朱熹哲学研究』『宋明理学』『哲学与伝統』『古代宗教与倫理』等多数。

#### (172頁下段より)

最晩年の慎独説」、難波征男「在黄宗義《明儒学案》中的“慎独”」、(3)組で海老田輝巳「洪沢栄一与陽明学」の発表があり、その後、5人の大会発言の後、閉幕式で無事終了した。

8日(月)は、黄宗義の墓、王陽明生誕の地瑞雲楼、講学処龍泉山中天閣、天一閣、全祖望の墓等を参観。翌日散会となった。

(以上、共に正田啓佑)